

妊娠中のコロナウイルス修飾ウリジン RNA ワクチン (SARS-CoV-2) 接種が 分娩に及ぼす影響

茨城県立中央病院 薬剤局 薬剤科¹⁾ 産婦人科²⁾ 小児科³⁾

○千葉布季子¹⁾, 田山薫¹⁾, 安部加奈子²⁾, 齋藤誠³⁾, 木村晶子¹⁾, 高田聖子¹⁾,
青山一紀¹⁾, 廣引真以¹⁾, 岩田美穂子¹⁾, 藤平幸恵¹⁾, 鈴木美加¹⁾

1 はじめに

妊娠後期の妊婦は、新型コロナウイルス感染症の重症化リスク因子の一つとされており、厚生労働省では妊娠中の新型コロナウイルス感染症に係るワクチンの接種を推奨している。妊娠中の接種に関する妊娠、分娩転帰については、外国人を対象とした報告では母体及び胎児への影響は未接種の妊婦と比較して有意差はみられていないが、日本人での報告は限られている。そこで、今後の妊娠中の医薬品使用に関する相談応需業務の一助とすべく、茨城県立中央病院（以下、当院）で接種した妊婦を対象に、コロナウイルス修飾ウリジン RNA ワクチン (SARS-CoV-2)（以下、ワクチン）の接種が分娩に及ぼす影響の調査を行うこととした。

2 方法

2021年9月21日、9月28日、9月30日、10月12日、10月19日及び10月21日に当院でファイザー社製ワクチンを接種した妊婦のうち当院かかりつけの妊婦を対象とし、母体情報（分娩年齢、分娩週数、分娩様式、接種時期、合併症）及び新生児情報（分娩時の身長、体重、Apgar スコア、形態異常の有無）について、電子カルテにより後方視的に調査を行った。

3 結果

対象となった妊婦は17人であり、全員が単胎妊娠であった。分娩年齢中央値は30歳（25–40歳）、分娩週数中央値は38週2日（35週1日–40週6日）であった。分娩様式は経膈分娩が12件、帝王切開が5件であった。対象期間に当院で1回接種した妊婦が4人、2回接種した妊婦が13人であった。1回接種した妊婦のうちの1人は2回目の接種であり、残りの3人は2回目を接種する前に分娩となっていた。接種時期は、第1三半期が3回（2人）、第2三半期が12回（8人）、第3三半期が15回（10人）であった。妊娠合併症は妊娠糖尿病が1人、切迫早産が6人であった。新生児については、17人のうち3人が早産児であり、うち2人は低出生体重児であったが、在胎週数に応じた身体の大きさの定義では身長も体重も標準値内であった。出生5分後のApgar スコアは10点が1人、9点が16人であった。全出生児に形態異常は見られなかった。

4 考察

本調査では、いずれの時期に接種した場合においても児の成長阻害や形態異常はみられなかった。母体の合併症については、妊娠糖尿病が17人中1人（5.8%）にみられたが、わが国での発生頻度（7–9%）と同等であった。分娩週数については、17人中3人（17.6%）が早産であり、厚生労働省「令和3年度出生に関する統計」の早産割合（4.7%）より高値であった。3人のうちいずれの妊婦においてもワクチン接種以前より早産のリスク要因（切迫早産、精神疾患）を有していたためワクチン接種と早産の明確な関連性は確認できなかった。重症化を防ぐ観点から新型コロナウイルス感染症に係るワクチンの接種は必要と考えるが、早産リスクの高い妊婦への投与に関しては慎重に経過を観察するとともに、データを積み引き続き検討していく必要があると考える。